

目次

後樂園について

— 名称の出典 —

『殺し屋』 (ヘミングウェイ作)

についての評論

創作 (長編)

青い湖

詩

都会の祭り

幻影

まなざし

苦悩

ある日の日記

創作

鯛と猫と人

断崖

教諭 大月 邦彦

4

教諭 太田 俊秋

17

二年 神野 章一

19

二年 神野 章一

39

〃 〃

40

一年 榎 忘乃

41

〃 〃

42

一年 深谷 活子

45

一年 森 真一郎

50

一年 深谷 活子

53

詩集と詩

忘却の湖

青の静寂

夜の催眠術

FOR・YOU

燈籠

投稿創作

すぎの実

河童物語

投稿詩

或る地帯

ある女の死

親友

生

創作

寺

編集後記

一年 湯浅 信一 48
一年 肥後 真理子 50
一年 森 真一郎 50
三年 貝畑 恵子 53
三年 靖智 独舞 53

一年 遁馳 凡作 54
一年 尾原 途子 57

二年 矢瀧 和子 58
二年 郷光 美由紀 59
藤雅秋 60

一年 湯浅 信一 61

64

投稿

すぎの実

遁 馳 凡 作

「だからよー。」
外で大きな声をする。手紙を書いていた私は、ふとその手を休めて耳を傾けた。近所の子供たちらしい。手を伸ばして机の横の窓を開けてみた。ひんやりした晩秋の空気がすうと室にはいつて、それと共に急にはっきりとした声が聞こえた。

窓から見える大きな木の下に、六七人の小さな子供たちが集まっている。一人の大きい——大きいといってもせいぜい小学三四年だが——子を中心にしてぐるっと回りを取り囲むようにしている。この子が兄貴格だろう。さっきの大きな声もこの子だった。ほこりで少し白っぽくなった小さめの学生服を着、体育帽の白いのをあみだに被って兄貴分の威厳を示し、ほかの子供たちに来るで小学校の先生がするように話している。聞き手もこれまた黙りこくって兄貴分のお話を神妙に聞いている。みんな近くに住むアパートの子供たちだった。どうやらすぎの実を取りに来たらしかった。手に手に持っている短い竹筒を見るに、どうもすぎ玉鉄砲の玉にするようだ。すぎの実を竹筒に詰め細い竹棒で押し、空気の圧力を利用して打ち出すのである。

ち上がった。おもむろに下を見下して、誇り高い顔をニヤッと笑わせる。もう一方の手ですぐそばのすぎの実を二つ三つむしり取って下の見物人めがけて投げまたニヤッと笑った。そして幹を持っている手を代えて、立っている枝にまたぐって座り、上着のポケットに実を入れ始めた。下の見物人たちは相変わらず黙ったままで見つめている。登りたそうな顔を誰が上に向けて手を組んだり離したり、服にこすりつけたりしてたまらない気持ちだ。

「僕も登るよー。」

あまりたないうちに突然声が上がった。決して大きなきつぱりとした声ではなかったが、沈黙がずっと続いていたのでとても鮮明に聞こえた。小さな、今年やっ和小学校に上がったばかりのような子だった。肩を少し上げ、足を心もち開いて、登りたいのはどうすることもできないという顔だ。上向きに口を開いて言った跡を残している。

登っている兄貴分が取る事を止めて下を見た。枝につかまってぐつと体をつき出し、木の縁を越えて覗きこむ。言葉の主を確かめるように見まわし、上を向いているさっきの子を見つけて、

「またのりちゃんか。そこにいろよ。待っているよ。あとですぎ玉やるからさ。」

けれどものりちゃんと呼ばれたさっきの子は諦め切れない様子だ。下を向き口の中でものを言うようで、こんな時小さい子がよくするよう、体をよじったりねじったり、不満やるかたない。

再び上を向いて兄貴分をどうしてもという目で見、登りたいという気持ちに追われたんだらう、枝の下まで来た。そして自分のすぐ上の枝を見て、つかまろうと飛び上がった。一番低い枝でもこの子の背より高くて、飛び上がらないとつかむことができないのだ。

る。私は小さいころをふっと思い出して懐しくなった。

ところがすぎの木の下まで来たものの、かんじんの実が手の届くところには無くなってしまっているらしい。たぶん他の子供たちが取ってしまったのだらう。兄貴分が打って見せているがスパン、スパンというあの気持ちの良い音がせず、あまり玉も飛ばないようである。そこで兄貴分自ら木の上に登って良い実を取ってやるから、あとの子は下で待っていると言っているところだった。

やがて兄貴分が登り始めた。大きいといってもまだ小学生、登り方がなんとなくぎこちない十メートル以上もあるうというのに枝打ちしていない幹をゆっくり登って行く。真剣そのものの表情だ。口をびたりと結び、目を据えて確実に枝を握って登る。それを下に残っている子供たちが一心に見ている。あまり一心に見ているので少しが抜けているようにさえ感じられた。

それでもようやく兄貴分は二階で椅子に座っている私とちょうど同じくらいの高さまで登ってきた。そして片手を横にずっと出ているし、しっかりした枝にかけ、バランスをとりながら太い枝の上にすくっと立

「下にいろっば。やるからさ。登ってくるなよ。」

ともう一度今度は少々むっとした声がかかる。

しかし、一度小さな子がこうするぞと決心したことを言葉だけで変えるのは難しい。第一その言葉自体が耳にはいらぬ。一途にそれに向かってしまう。この子の場合もそうだった。飛びつくことに一生懸命、兄貴分の言うことなんか耳にはいらぬ。そして何度か繰り返したのち、やっと枝にぶらさがった。

「じゃ、かってにしろよ。そんなかわりお前にはすぎ玉やらないぞ、いいか。」

ぶらさがったのと同時に、それまでじっと見ていた兄貴分が言った。威厳を犯されたという不気嫌な顔である。再び実を取り始めた。下から登ってくるやつなんか知らんと、さっきの子を見ようとせせず自分より上の方にある実ばかりを取る。二つ三つとかたまつてついているのをむしるようになって、葉が一緒になっているのかまわらずにポケットに入れる。登ってくる子は相手にしないという態度だ。

下で見ている子供たちはさっきからずっと何も言わない。ひごろはあんなにやかましく騒ぎ立てる子が今はしんと黙っている。登っている子として見ている子を見、そして視線を上げて兄貴分を見また視線を落として登っていきこうとする子を見るだけだ。しかしただ一つ、目だけは自分も登りたいという事を表わしている。けれども兄貴分の命令に背いてまで、という気はさらさら無さそう。

さて、さっきの子はと見ると、さっきと同様まだぶらさがっている。さかんに登ろうと足を上げているが、まだ小さすぎる腕の力が無い、どうしても足が上がらない。体をよじるようにしてなんとか枝に足をかけようとしているがどうもだめなようだ。ちやうどこちらに

背を向けているので顔が見えないなと思っていると、とうとう諦めてぶらさがっている手をはなしてつちに向いた。もうほとんど泣き顔だ。そして涙いっぱい目で見上げて上を見上げる。

私は登っている兄貴分に何か言うなと思った。兄貴分の子は知らん顔をしてさっきまで実ばかり取っていたのに、その子が諦めるとちよつと下を見て、あれほど顔を堅くしてたのを少しほころばせた。次にさっきの子にそれみたことかという顔をしてみせ、また実を取り始めた。今度は大きくゆっくりと実を取り、さも見ると言わんばかりである。そして実を引きちぎることに

「こいつはすごい。六つもあるぞ。」

「大きすぎるなあ。いいやつのに惜しいなあ。」

「あれ、この葉は茶色になっていいるぞ。見てみろよ。」

とか言う。それがあまりにわざとらしくて、まるで一人で芝居をしているようである。明らかに何か言われるのを期待していた。

そんな状態でしばらく時間がたった。何かを待っているときは時間の流がれ遅く感じられる。さっきの子も見上げたままの姿勢を少しも変えない。そして目には涙がいっぱいだ。しかしまだ何も言わない。時間がたつ。やがて登っている兄貴分の声がだんだん小さくなった。ポケットが実でいっぱいになったらしい。下の子はしかし言わない。兄貴分も降りてこない。言うのを待っているのだ。ポケットの実を取り出して一つづつ調べてみたり、そうかと思うとナイフを取り出して幹に傷をつけたりして実を塞いでいる。そして下を見ないようなふりをして、それでいてちりちりりと覗く。

急にさっきの子が歩いて、ずっと垂れている枝の先の方に行き、実を取り始めた。泣き顔のまま背伸びをしてやっと取っている。その他

投稿

河童物語

尾原 途子

昔々、カッパ村という小さな村に、タコ助という三つになる男の子がおりました。タコ助は、とても泳ぎのうまい元気な子でした。

ところが、タコ助には大きな大きなはげがありました。このはげは、生まれた時からあるのですが、日に日に大きくなっていて、今でに頭全体に広がってしまい、はげのまわりにわずかに髪の毛が残っている程度でした。そのうえ、タコ助は出べそでしたし、出歯、天井鼻、下がり目、下がり眉等々、器量がとびきり悪かったのです、その名前は隣村まで知れわたっておりました。

タコ助は、そのみてくれだけで、友達が自分だけをはねのけにするので、せめてはげをかくそうと思いました。それで、何とかいうものではげを黒く塗りました。ところが、それを見ると、皆は余計にはやしたてるばかりでした。だから、それを落とそうとしたが、いくらこすっても落ちません。そこでこの恥ずかしい頭をどうにかしなくではと思っている時に、亀を手に入れました。亀の甲らをつつきながら、「亀は髪の毛が一本もないけど、誰も何とも言わないし、頭をかくこともできる」と考えて、自分も亀になろうと思いました。

タコ助は、先ず甲らをつくらうと思いました。そこで、土をこねて

は見向きもしない。ただひたすらという感じである。

そのうちに兄貴分が降りてきた。一度ならず二度までも兄貴分の威厳を犯されたという気持ちがありありと顔に浮んでいる。厳しい目つきで実を取っているさっきの子をにらむ。そして向きを変えてあの子の方に行った。

あの子供たちは相変らず黙っている。兄貴分がポケットから実をつかみ出して分け始めると、とたんにわいわいと口々に争奪して手を出す。これが普通だけれど今までずっと黙っていたのでちよつと異様な感じだ。何事も無かったように兄貴分を取り囲んで話し出す。兄貴分はそれをちよつと人気がスターが取り囲まれたときするように、ひどい目に合ったというような顔を時々は見せながら、それでも顔をスターのその如くほころばしている。そうこうしているうちにどうやら分けるのが一段落ついたらしい。あの子供たちは実をつめてスパン、スパンと打ち始めた。その脇で兄貴分はもう一度まだ実を取っているさっきの子を見、表情なくそれでいて深く言った。

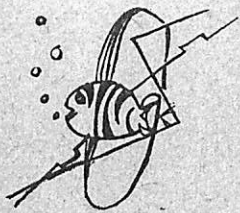
「のりちゃんにはあげないよ。」

私は窓を閉じた。まだ手紙は書き終えてなかった。しかしもう書く気はしなかった。

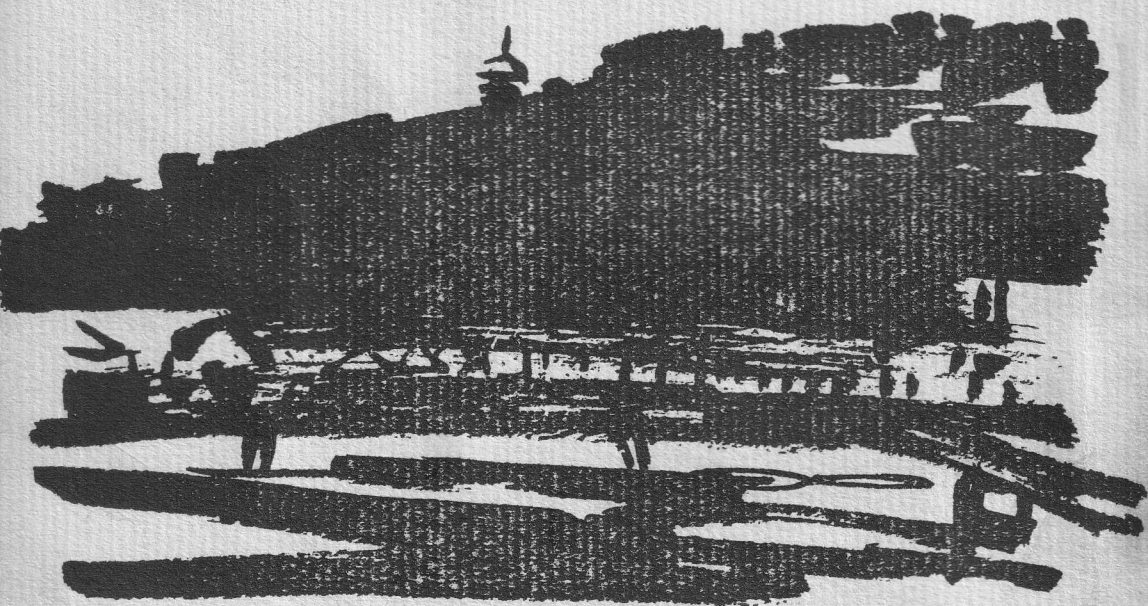


甲らをつくりました。けれども、土の甲らは乾かしているうちに、ひびがいて、ところどころ欠けました。タコ助が背中にくくりつけて水にはいると、土の甲らは溶けてなくなってしまう。今度は木の甲らにしました。これはなかなか困難をようしましたが、辛苦のかいあって成功でした。形は無格好でしたが、舟の役もするし、色々と便利でした。

タコ助が四つになった時、お母さんが死にました。お父さんは、二度目のお母さんをもらおうと思いましたが、変ちくりんな男の子がいるからと、誰もきくれません。お父さんは、元々男の子が好きでなかったもので、古亀が主という山奥の沼に捨ててしまいました。ここで、タコ助はすぐに古亀と仲良しになり、親子のようにして、暮らしました。そうしているうちに、タコ助の頭には昔が生え、甲らも密着して、古亀の跡緒として、その沼の主となりました。



朝日文学



28号

朝日高校文学部